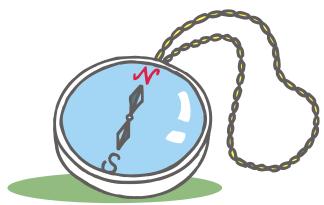


# 羅針盤

第27号

令和5年12月4日(月)



## ◆ 12月6日は『音の日』

季節が移り変わるのは早いもので、年末である12月、つまり、師走（しわす）を迎えることとなりました。これから残された今年という日々の中で、街はイルミネーションで美しく彩られて輝き出したり、クリスマスに向けての音楽で賑わい出して、慌ただしく過ごすような時期になっていきます。まだまだ十分にコロナ禍が払拭されたとは言い難い日々ではありますが、年末の恒例となった「流行語大賞」が発表されたり、「今年の漢字」といったことが発表されたりする季節でもあります。一年前までは、新型コロナウイルス感染症の感染者数によって右往左往するような日々が続いて、「コロナに慣れすぎてしまわないこと」や「コロナ感染を抑止する対策について気を緩めないこと」、そして、「コロナ感染を甘く見ないこと」が重要であるといったことが、withコロナの意識を構築していくうえではとても重要であることであると言われてきました。一人ひとりが、意識して、気を緩めることなく、継続して心がけていく必要はあるでしょう。さて、明後日は12月6日です。余りたくさんの人々に知られているわけではありませんが、実は12月6日という日は『音の日』と呼ばれています。1877年12月6日、アメリカの発明王として有名なトーマス・エジソンが、世界で初めて音の録音や再生を可能にした初代蓄音機「フォノグラフ」の発明に成功した日です。（掲載した写真が、エジソンが発明した円柱の蝸管（ろうかん）に音を深さで刻む蝸管式蓄音機です。）それから10年後にはレコードが発明され、その約80年後にはカセットテープが、そして、その20年後にはCD、また、その10年後にはMP3が、現在は家庭でもCDがつくれたり、パソコンやスマートフォンに音楽をダウンロードして聴くなど、様々な方法で音楽を楽しむことができるようになりました。145年前の世界では考えられない時代がやってきているというわけです。遙か昔から世界各地で、たくさんの人々が音楽を楽しんできたわけですが、この150年余りの間に、生演奏に限りなく近い形でたくさんの音楽の録音や再生に関わる機材がつくられ発展してきました。きっとこれから先も更なる発展を遂げていくことは間違いないことだと思いますが、これまでのような研究が積み重ねられて、現在に至るまでには、そのことに携わってきた多くの人々の叡智や弛まぬ努力があったからこそで、そのことに触れる機会を持つこともとても大切なことだと思います。また、太古の昔からエジソンが蓄音機を発明するまで、音楽は「生の演奏を目の前で聴くこと」が当たり前でした。もちろん、現在でも生ライブでの様々なアーティストのコンサートや演劇、あるいは、ミュージカルなど、広く大きな会場で、自分の目で見て、自分の耳で聴いて、たくさんの観客や会場の雰囲気を肌で感じることはとても楽しく素晴らしいことであることに間違いはありません。そして、そのことはどんなに録音や再生の機器が発展していくっても変わらないことでしょう。新型コロナウイルス感染症の完全なる終息が訪れて、全く何の気兼ねをすることもなく、制約も課されることのない形で、たくさんの観客が一堂に会して、誰もが心から安心して参加することができる生ライブでのコンサートが行われることが待ち望まれています。

